

蝉の声、汗で張り付く洋服、首元の髪の毛の煩わしきで夏が来たことを実感する。

「あ、そうか。今日六日だ」

スマホの画面を開いてふと気づく。

この街では六日になってもテレビもラジオも平常運転で、黙祷の合図のサイレンもならない。学校も登校日にならなければ、店が開店時間を遅らせることもない。今日が何の日なのか知らない人もいる。

かくいう私もいつも通り電車に乗って、気持ちばかりだが目を瞑る。傍から見ればただの居眠りにしか見えな
いだろう。

夏が来ると、小さな頃毎年祖母と一緒に電車で曾祖母の家を訪れていたことを思い出す。その時に乗っていたのはアクリル絵の具の「やまぶきいろ」みたいなまっ黄色の電車だったことも。

水面

*

「かざはや、やすうら、あと、あきかわじり、にがた、ひろ、しんひろ、あきあが、くれ、かわらいし、よしうらー」

「よう読むねえ。さくらちゃんは本が好きじゃねえ、漢字もようけ知っとるんじゃねえ」

車窓から見える景色はきらきらと太陽を反射して輝く内海から、緑の中を切り開いて進むような風景へと変わ

っていく。海沿いから次第に山がちな土地を走るようになる路線で、難しい駅名を読んで聞かせては、祖母が喜んで褒めてくれるのが嬉しかったのをよく覚えている。

「もつと続きも読めるんよ！ うんとね、よしうら、かるがはま、てんのう、うわっ！」

ぐらん、と一つトンネルに入る前の大きな揺れ。カーブとトンネルの多い場所では路線図をひたすら読むこともできなくなる。

「さくらちゃん、読んでくれるんは嬉しいんじゃけど、危ないけえ座つとりんさい」

「はい」

景色もなくて、音もうるさいトンネルの中が退屈でちよつと怖くていつも早く着かないかなと思っていた気がする。

「おばあちゃん、あとどんくらいで着くん？ はよ大きいおふね見たい！」

「もちいとで着くけえ座つときんさい。お船は逃げやせんんんじゃけえ」

「でもさくら、もう電車乗っとるの飽きてしもうたよ」

「もちいとの辛抱よ。ほうかね。これ食べときんんちゃ

い

祖母は花柄の包み紙のキャラメルを電車に乗るときはいつも持っていて、お腹が空いたとかまだ着かないのか言っでごねる私に食べさせてくれた。だから今でも電

車に揺られていると、口の奥に染み込むように甘いキャラメルを思い出す。

「これ食べていいん？　ありがと、おばあちゃん！」

「お腹空いとるんほど悲しいもんはないけえねえ、食べんさい、食べんさい。でも後でひいばあちゃんちでもごはん食べるけえ、一個だけにしときいね」

「うん」

お盆が近づくと、祖母と二人で曾祖母の家を訪ねることが毎年の恒例だった。そこに親戚一同が集まって法事や何やらの話をしていたのだ。幼い私にとってはただひいおばあちゃんに会える日、ご馳走が食べられる日という認識でしかなかったが。そしてその時には、海の青に映えるようにと真つ黄色に塗られたこの電車に乗って、先に「おおきなおふね」を見に行くのがお決まりだった。

「おばあちゃん、いつお船のどこにつく？」

「もう次の駅よ。降りる準備しとき」

「やった！　もっさくらいつでも降りれるよ！」

私はその船を見るのが大好きで、一年に一度の楽しみだった。周りからは女の子らしくない、と言われることもよくある、人形よりも車や船のおもちやが好きな子供だった。そんな私にとって、陸にある大きな船は夢みたくて、最寄り駅に着くずっと前からそわそわしていたのだった。

今思うと不思議だが、そのころ私はあの「おおきなおふね」がいつか陸から離れて海へ出てしまうのではないかと思っただけで心配していたのだ。船とはいうものた

十分の一サイズのよくできた模型でそんなことあるはずないのだが、昔の私はあの船は出航の時を待っているのだと、いずれ海があつた時には陸を去ってしまうのだと漠然と信じていた。

その不安からか、いつも駅から五分ほど歩いたところにあるミュージアムの中に入ると急いで船に向かった。

「やまとー」

祖母の制止も聞かずに駆け寄って、船の模型を上からのぞき込んでいた。十分の一サイズでも十分に迫力のあるその模型は、子供の体で見ると今よりもさらに大きく見えていたのだろう。

「さくらちゃん、そんな走つたらころげるよ！」

祖母の言葉も耳に入らない程わくわくしていた私は、

船が海に出ていないかどうか確認したかったのだ。模型だから海へ出られるはずもないのに。

ミュージアムの中心部に鎮座するその戦艦は、上は青みが買ったグレー、下は赤、と半分に分けられており、先端は鳥のくちばしのような曲線を描いていた。そしてその向こうには窓ガラス越しの港が見えていた。

飽きつぱいはずの私が、そこに来ると三十分近く黙って船を見ていた。

ぐるぐると船の模型の周りを歩き回っては、何を言うでもなくただじっと見つめていた、と少し大きくなった時に教えてもらった。祖母はその間、私が満足するまで海を見ながら待っていてくれた。でも、船はあまり見えていなかった気がする。

「おばあちゃん」

「どしたん、さくらちゃん？」

「おおきいねえ」

私は散々眺めた挙句それだけをぼつりと云つたらしい。これも自分では覚えていない、祖母から聞いたことだ。

「お船、見れてよかったねえ。そろそろひいおばあちゃんちいく？」

「うん」

一年に一度の船との邂逅を無事果たし、船が陸にあることに安心した私はきつと満足げに曾祖母の家に向かったのだろう。もう一度駅から電車に乗り、曾祖母の家までは二駅戻らなければならない。

「おばあちゃん、さくらお腹空いたわ」

「さくらちゃん、ずうつとお船見とったもんね。でももうひいおばあちゃんち着くけえ、これ食べとき」

祖母はキャラメル他にもボンタンアメをよくくれた。オブラートで包んであつて、上あごにくつつく感覚は鬱陶しいが、柑橘の味は大好きだった。

祖母はお腹が空いたという言葉に敏感だったな、と思う。父や母は晩ごはんの前にお菓子を食べたりするところ、「ご飯が食べれなくなるでしょ」と言っただけで、祖母は違つた。「お腹が空いとるのは一番悲しいことよ」と言っただけで、食べきれないほどのおやつを買ってきただけのものだった。また、料理上手で私の好きなものをなんでも作ってくれた。

「さくらちゃんはなんでもおいしゅう食べてくれるんねえ」

最近ではもうあまり見なくなった花柄の鍋やフライパンで私の好きなカレーやシチューをよく作ってくれた。特に大きなジャガイモやカボチャが入っているのが好きだった。

でもある時気づいたのが、祖母自身はゴロっと入ったじゃがいもやカボチャはあまり食べなかった。私の皿には大きなものを四つ五つ入れてくれるのに、自分の更にはせいぜい一つしか入れないのだ。子供心に気になった私は一度、なぜ嫌いなのか尋ねてみたことがある。

「ねえ、おばあちゃん。なんでおばあちゃんじゃがいもとか嫌いなん？ こんな美味しいのに。 さくら、大好きよ」

「ありやあ、ばあちゃんが食べとらんのばれてしもうたかあ」

祖母はいたずらがばれて困った子供みたいに笑って、ぼつぼつと説明してくれた。

「おばあちゃんがねえ、今のさくらちゃんぐらいこまかった時にはね、戦争が終わってすぐの時でねえ」

戦争、と聞くと仏間に飾ってある高祖父の顔を思い出した。小さな頃よく「ひいひいおじいちゃんは大きいお船に乗ったんよ」と聞いていた。幼いころ、「船に乗っていた」と聞いては操縦士や漁師のようなものを想像していたが、私の高祖父は軍港のある町で生まれ育った人だった。彼は下士官として巡洋艦に乗っていたのだ。

若くして亡くなっていたので会ったことはないが、祖母が見せてくれた白黒の写真の中に映っている姿はみたことがある。年に一度だけ会う叔父にそっくりの目と、父によく似た鼻をして、親族の中では珍しい長身の男性だった。自分が乗っていたであろう船をバックにびしりと背筋を伸ばして立っているのが、私の知る唯一の高祖父だ。

彼を知る人は皆彼を素晴らしい人だった、と口々に言う。もし戦争がなければ学校の先生にでもなっただろう、と。しかし彼は、自ら海軍に志願して下士官になった。そして若くして命を落とした。乗っていた船が沈んだのだ。日本史の教科書には出てこないけれど、大勢の人が乗った船だった。

「食べるもんなんてようけなくてね、畑になつとるじゃがいもとかかぼちゃとかのふかしたもんばあ食べようたんよ」

祖母は昔の話を自分からはしなかった。でも私が聞いたときは、忘れていたことを思い出すように、手繰り寄せるようにして語ってくれた。

「ふかした芋じゃけえ大して味もせんでねえ。ほいでも他に食べるもんものうて、食べれるだけで恵まれとったんよ。もつと、ようけようけ人が死んじゃった所もあつたんよ。」

その頃の私には、「ふかした芋しか食べられない」ことからも「たくさんの人が死んだ」ことも、どちらもよく分からなくて、それらが何を意味するのかが理解できなかった。ただおばあちゃんの顔で、それが悲しいことだと

いうことだけが分かった。分からないことばかりの私はその話を聞いて黙っていた。

「じゃけんね、さくらちゃんはお腹いっぱい食べんさい。おばあちゃんらが子供の時とはちごうて、今はスーパーに行ったらなんでも売つとるんじゃけえ。好きなもん好きなだけ食べんさい。おばあちゃん、言うてくれたらなんでもこうてきちやるよ」

何も話さない私を見て、祖母はにこにこしながら大きくて分厚い頭を撫でてくれた。カレーを作った後の手は少し玉ねぎのにおいがしていた。

*

そういえばまだ今年の実家に帰っていないな、と思いつつながら玄関の扉を開ける。

「ただいま」

誰もいない部屋に一回きりのただいまが吸い込まれていった。

今日はカレーにしようと思う。しかも大きなじゃがいもがごろごろ入ったやつ。